

1935 年台湾新竹-台中地震の新竹州における地震記念碑について

修平科技大学 観光與創意学院 応用日語系* 塩川 太郎
(佛教大学大学院 日本史学専攻 博士後期課程)

The Memorial Towers in Hsinchu Prefecture of the 1935 Hsinchu-Taichung Earthquake

Taro SHIOKAWA

Department of Applied Japanese, Hsiuping University of Science and Technology
No.11, Gongye Rd., Dali Dist., Taichung City 412-80, Taiwan
(Graduate School of Literature, Bukkyo University)
(Kitahananobocho 96, Murasakino, Kita-ku, Kyoto 603-8301, Japan)

The Hsinchu-Taichung Earthquake occurred in the central part of Taiwan on April 21, 1935. The quake, which killed over 3,200 people, was the costliest one in Taiwan. This study investigated the earthquake memorial towers of Hsinchu Prefecture. The result showed that there are 7 memorial towers; 4 in 1935, 1 in 1936 and 2 in 1938 respectively. However the memorial towers were built earlier than Taichung Prefecture (1936). Six out of seven are cenotaphs. The context of 3 memorial towers were falsified; either the year was cut or the characters were changed. The memorial ceremony only be held in Daikatei, while other areas don't. Several memorial towers are left and weathered. Earthquake memorial towers of Hsinchu Prefecture are different from the Taichung Prefecture. It was revealed that these memorial towers didn't maintain the duty of the dispatch device which conveyed a message of past earthquake damage in the present age.

Keywords: 1935 Hsinchu-Taichung Earthquake, Memorial Tower, Hsinchu Prefecture, Taiwan under Japanese rule

§ 1. はじめに

1935 年(昭和十年)4 月 21 日に台湾中部で発生した新竹-台中地震(M7.1)は、死者 3200 名を超える台湾における過去最大の被害地震で、新竹州から台中州の広い範囲に被害が及んだ[台湾総督府(1936), 鄭他(1999)].

台湾総督府の主導による復興後、地震により甚大な被害が生じた地域には、記念碑が建てられた[陳(1999)]. 塩川(2014)によると台中州(現在の台中市)では、内埔庄(后里区)、神岡庄(神岡区)、清水街(清水区)の 3 地域に地震記念碑があり、現在も公的な慰霊行事が行われていることが明らかとなった。しかしながら、新竹州(新竹県~苗栗県)における地震記念碑については一部資料があるものの、全容は不明のままである[黄(1990), 森・呉(1996)など].

そこで、今回は台湾の新竹州における新竹-台中地震に関する地震記念碑の調査を実施し、新竹州の記念碑の現状を明らかにするとともに、各地域にある

記念碑の違いと存在意義について考察を行った。

記念碑の碑文については正確に記録保存するため、2014 年 2 月 24 日~3 月 17 日にこれらの記念碑において拓本を試みた。碑文の位置は塩川(2014)を参考に、正面を A 面とし、時計回りに B 面(左側面)、C 面(背面)、D 面(右側面)とした。

§ 2. 新竹州における地震記念碑

新竹州では、三灣庄から獅潭庄付近(獅潭断層沿い)と銅羅庄から大湖庄付近(震源地付近)で大きな被害が生じた[新竹州(1938), 徐(2005)]. 屯仔脚断層沿いの 3 地域に被害が集中した台中州とは異なり、新竹州では広範囲にわたって被害が見られた(表 1)。

今回の調査により新竹州には、新竹-台中地震に関する地震記念碑が三灣庄に 1 基、獅潭庄に 1 基、公館庄に 2 基、銅羅庄に 2 基、大湖庄に 1 基の合計 7 基あることが分かった(図 1)。

* 412-80 台湾台中市大里區工業路 11 號
電子メール:kuwataro@mail.hust.edu.tw

表1. 新竹州における 1935 年台湾新竹-台中地震の被害

Table 1 Damage caused by 1935 Hsinchu-Taichung Earthquake in Hsinchu Prefecture.

地区	(読み方)	死者(人)	重軽傷者(人)	住宅全壊(戸)	住宅半壊(戸)
銅鑼庄	どうら	327	584	1332	275
公館庄	こうかん	250	1104	1294	587
三灣庄	さんわん	153	470	918	119
南庄	なん	125	489	1287	211
卓蘭庄	たくらん	98	207	474	295
三叉庄	さんさ	96	175	880	90
大湖庄	たいこ	85	321	939	462
頭屋庄	とうおく	58	261	742	178
獅潭庄	したん	45	120	345	119
苗栗街	びょうりつ	38	301	603	491
造橋庄	ぞうきょう	22	44	186	383
後龍庄	こうりゅう	15	123	556	678
峨眉庄	がび	13	85	873	61
苑裡庄	えんり	11	39	109	408
頭分庄	とうぶん	10	51	462	669
四湖庄	しこ	10	52	373	210
通霄庄	つうしょう	4	39	61	313
新竹市	しんちく	4	19	91	142
竹南庄	ちくなん	3	31	207	314
寶山庄	ほうざん	1	21	204	213
蕃地(大湖)	(たいこ)	1	3	11	43

資料: 台湾総督府(1936)及び澤田(1938)をもとに作成.

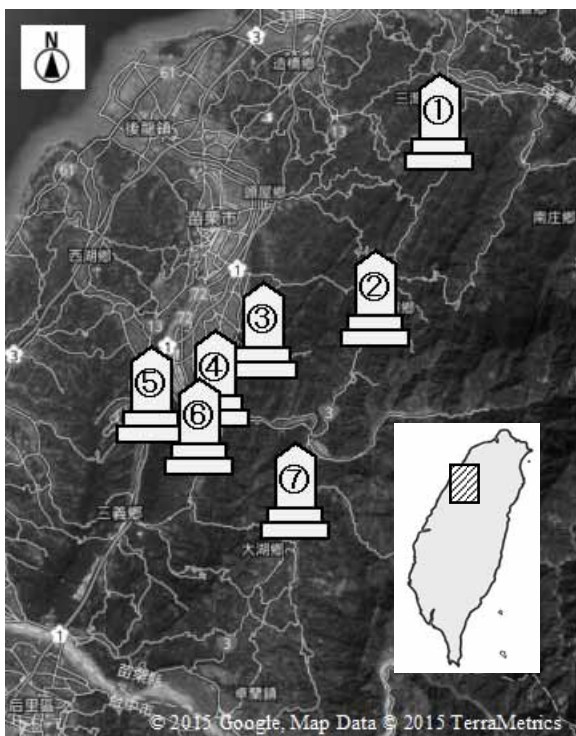


図1. 新竹州における地震記念碑の分布
Fig.1 Distribution map of the memorial towers in Hsinchu Prefecture.

- ①震災慰霊碑(三灣庄大河底)
- ②大震災獅潭庄殉難者慰霊碑(獅潭庄新店)
- ③震災本庄之殉難者二百六十二氏記念碑(公館庄公館)
- ④大震災殉難之碑(公館庄石圍牆)
- ⑤震災遭難者慰霊碑(銅鑼庄銅羅)
- ⑥震災殉難者慰霊碑(銅鑼庄老鷄隆)
- ⑦震災記念塔(大湖庄大湖)

2.1 三灣庄大河底の地震記念碑

三灣庄は、新竹州中部にある中港溪の南側に位置し、現在の行政区分は苗栗県三灣郷に属している。新竹-台中地震の震源地の関刀山からは 30km ほど離れているが、三灣庄内で獅潭断層が動いたことから、甚大な被害が生じた。三灣庄における地震の被害は、死者 153 名、重軽傷者 470 名、住宅全壊 918 棟、住宅半壊 119 棟であった(表 1)。碑がある大河底の住宅全半壊率は 100%に達し、住民の死亡率は 4.3%であった[被害数、被害率については、いずれも台湾総督府(1936)].

① 設置場所

地震記念碑は、地震発生から3年後の1938年4月に地元の人々の寄付により大河底派出所南東側の丘の上に建てられた。1979年に道路建設のため、現在の大河底派出所(三灣郷大河村大河底48号)内に移動した。

② 地震記念碑概要

記念碑は、3段ある基壇の上に先端が尖った直方体の碑を加えた構造で、碑の素材は砂岩である。上段、中段の基壇は姫路城などでみられる石垣のような形となっている。基壇の下段の幅は293.5cm、高さが83.0cm、基壇の中段と上段を合わせた高さが116.0cmである。最上段部の記念碑の高さは、104cmで、その幅は1辺24cmである(図2、図3)。

③ 碑文

A面(正面)

「震災慰霊碑」(図4A)。

C面(背面)

「震災第三週年記念日ヲ迎フルニ當リ之ヲ建立シ霊ヲ慰ム

〇〇十三年四月二十一日 建立」。

B面とD面は碑文無し。



図2. 大河底の地震記念碑

Fig.2 Memorial tower in Daikatei.

(2014年2月筆者撮影)

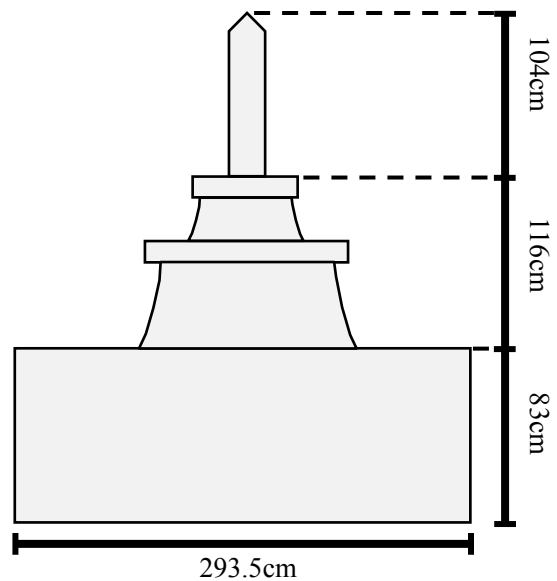


図3. 大河底の地震記念碑概略図

Fig.3 Memorial tower diagrammatical view in Daikatei.

④ 改竄について

C面において改竄の跡が見られる(図5)。建立した年月日が彫られた部分に削り取られた跡が確認できる。削られた部分に続く文字が「十三年」であることから、ここには「昭和」の元号が刻まれていたと思われる。

⑤ 慰霊行事

日本統治時代は地元小学校の日本人教師が生徒と共に毎年神式の慰霊行事を行っていたことが、記念碑前に設置された看板に記されている。戦後は、毎年旧暦の3月19日に村長が村人を代表して慰霊を行っているが、村長が焼香をするのみの簡単な形式である。

2.2 獅潭庄新店の地震記念碑

獅潭庄は、前項の三灣庄の南部側に位置し、現在の行政区分では苗栗県獅潭郷となっている。ここでも獅潭断層が地震により動いたことから、深刻な被害が生じた。獅潭庄の被害は、死者45名、重軽傷者120名、住宅全壊345棟、住宅半壊119棟であった(表1)。記念碑が設置された新店の住宅の全半壊率は56.6%で、住民の死亡率は1.4%であった。[被害数、被害率については、いずれも台湾総督府(1936)]。



図4. 新竹州における地震記念碑の正面碑文(拓本)
 Fig.4 Front epitaph of the memorial tower in Hsinchu
 Prefecture (Rubbed copy).



図5. 改竄された地震記念碑(大河底)
 Fig.5 Trace of the alteration in the Memorial tower
 (Daikatei).
 (2014年2月筆者撮影)



図6. 新店の地震記念碑
 Fig.6 Memorial tower in Shinten.
 (2014年2月筆者撮影)

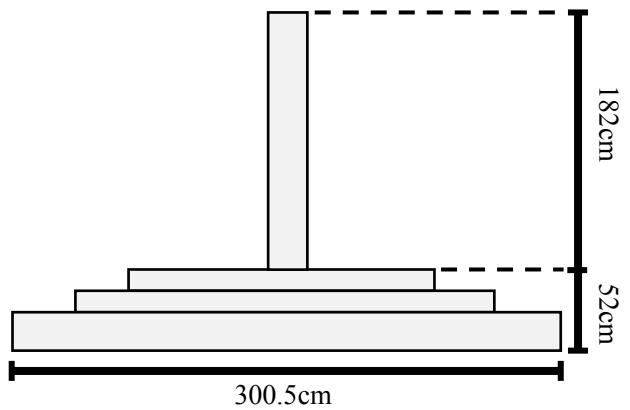


図7. 新店の地震記念碑概略図
 Fig.7 Memorial tower diagrammatical view in
 Shinten.

① 設置場所

獅潭庄の記念碑は、新店から仙山へ行く歩道に設置された[曾(1998)]. 1935年7月12日に建てられたことが碑文に書かれている。しかし現在は、住民の要望により1996年に役場の補助によって、獅潭郷の公共墓地(獅潭郷獅潭村公墓)内に移設された。その経緯が記念碑の基壇部分に新たに設置された碑に記されている。

② 地震記念碑概要

記念碑は、3段の円盤状の基壇の上に円柱状の碑が建てられている構造で、碑の素材は砂岩である。基壇の最大の幅は300.5cm、3段合わせた基壇の高さは52cmである。碑の高さは182cm、直径が30cmである(図6、図7)。その他、移設の経緯を記した碑が記念碑正面の基壇上に設置されている。なお、移設前の碑の写真から、円盤状の基壇と移設の経緯を記した碑は、移設前には無かったことが分かっている[黄(1992)].

③ 碑文

A面(正面)

「乙亥年四月二十一日
奉謝 獅潭庄震災記念
慰殉難五十三氏之靈碑
乙亥年七月十二日建設」(図4B)。

基壇上の移設の経緯が記された碑。

「乙亥年四月二十一日
獅潭震災殉難記念碑原堅立於新店往仙山歩道之中由於地理人文因素及影响市容觀瞻經村民建議遷移請示百壽及鳴鳳恩祖公恩准蒙鄉公所撥款補助將此石碑遷移此地作之記念 中華民國八十五年春遷立」。

④ 改竄について

碑文の年号の部分で改竄が見られた。現在の記念碑の碑文では二か所で「乙亥年」(西暦1935年)となっているが、その周辺では碑の表面を削ったような跡がみられる(図8)。

⑤ 慰霊行事

現在慰霊行事は行われていない。調査した際には、墓地内の藪の中に放置されているような状態であった。



図8. 改竄された地震記念碑(新店)

Fig.8 Trace of the alteration in the Memorial tower (Shinten).

(2014年2月筆者撮影)

2.3 公館庄公館の地震記念碑

公館庄は八角嶺山脈と後龍溪の間に位置し、現在の行政区分は苗栗県公館郷に属している。地震による公館庄の被害は、死者250名、重軽傷者1104名、住宅全壊1294棟、住宅半壊587棟であった(表1)。なお、公館の住宅の全半壊率が85.1%で、住民の死亡率は1.2%であった[被害数、被害率については、いずれも台湾総督府(1936)]。公館庄では公館(大坑)と石圍墻の2か所に地震記念碑があるが、ここではまず公館にある記念碑についての調査結果を示す。

① 設置場所

公館の地震記念碑は、行修寺(苗栗県公館郷大坑村6鄰)横の第二公園内に設置されている。1935年に建てられたことが文献で記されているが、具体的な日付は不明である[何(1997)]。

② 地震記念碑概要

記念碑は、5段の円盤状の基壇の上に円柱状の碑が建てられている構造で、碑の素材は砂岩である。円盤状の基壇の側面には、赤や青色の塗装が施された跡が見られるが、現在は風化によりわずかに色が残っているだけである。円柱状の碑の先端は尖っている。基壇の最大の幅は700cm、5段合わせた基壇の高さは172cmである。円柱状の碑の高さは170cm、直径が32cmである(図9、図10)。

③ 碑文

A 面(正面)

「昭和十年四月二十一日
震災本庄之殉難者二百六十二氏記念碑」(図 4C)

④ 改竄

碑文が改竄された形跡は見られなかった。

⑤ 慰霊行事

現在慰霊行事は行われていない。



図 9. 公館の地震記念碑

Fig.9 Memorial tower in Kokan.

(2014 年 1 月筆者撮影)

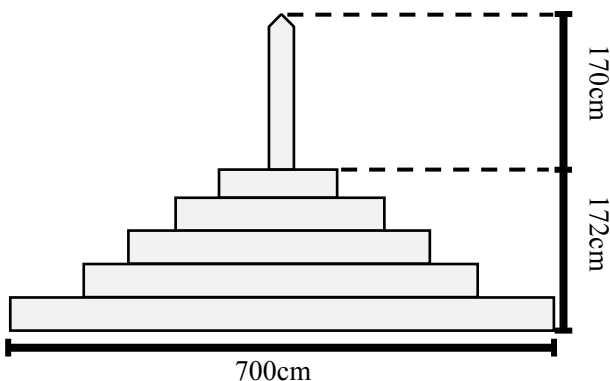


図 10. 公館の地震記念碑概略図

Fig.10 Memorial tower diagrammatical view in Kokan.

2.4 公館庄石圍墻の地震記念碑

石圍墻は、公館庄南部の後龍溪近くに位置し、1800 年代に開拓した際に、先住民からの襲撃を防ぐ

ための石壁を築いたという歴史を持つ[黄(1994)]. 地震による被害は大きく、石圍墻の住宅の全半壊率は100%に達し、住民の死亡率は 6.5%であった(表 1)[被害数、被害率については、いずれも台湾総督府(1936)].

① 設置場所

石圍墻の地震記念碑は、石圍村(苗栗縣公館郷石牆村)集落入口に設置されている。1935 年 5 月 18 日に建てられたことが碑文に記されている。

② 地震記念碑概要

記念碑は、2 段の直方体の基壇の上に円柱状の碑が建てられている構造で、碑の素材は砂岩である。基壇の最大の幅は 113cm、2 段合わせた基壇の高さは 99cm である。円柱状の碑の高さは 165cm、直径が 30cm である(図 11, 図 12)。

③ 碑文

碑文は、円柱状の碑の他、基壇部分にも記されている。

A 面上部(正面)

「昭和拾年五月十八日建立
大震災殉難之碑」(図 4D)

A 面下部(正面)

(省略) <83 名の殉難者氏名>

基壇 A 面(正面)

「嗚呼！氣流混沌，日赤月黃，陰陽反動，天地緊張。恰應兆於昭和十年四月二十一日年前六時二分，轟然一聲，山崩地裂，人不及避，鳥不待飛，家屋倒如廢墟，人畜壓如生葬。痛哉！我郷生民一千二百有餘，生無完膚，死無棺槨，八十餘人殉難，永為護郷護國之神，聊慰英靈皈依。爰將立石勒文，以紀其難焉。
石圍墻保民同立，陳漢初撰題。」

④ 改竄

碑文が改竄された形跡は見られなかった。

⑤ 慰霊行事

現在慰霊行事は行われていない。観光地の一部となっており、別の碑(石圍墻の歴史が書かれた碑)と共に周辺環境は整備されている。



図 11. 石圍牆の地震記念碑
Fig.11 Memorial tower in Sekiisho.
(2014年3月筆者撮影)

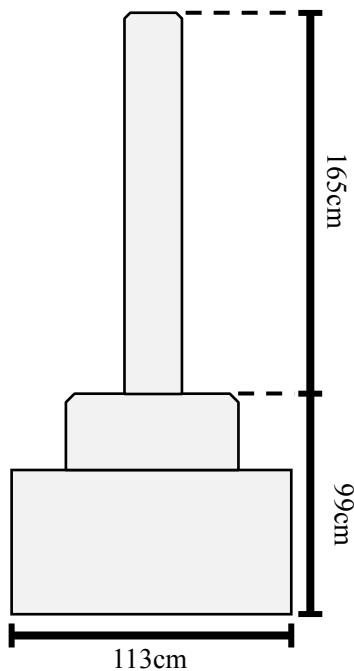


図 12. 石圍牆の地震記念碑概略図
Fig.12 Memorial tower diagrammatical view in
Sekiisho.

2.5 銅羅庄銅羅の地震記念碑

銅羅庄は前述の公館庄の南西側に位置し、後龍溪が公館庄との境になっている。現在の行政区分は

苗栗県銅羅郷に属している。地震による銅羅庄の被害は、死者 327 名、重軽傷者 584 名、住宅全壊 1332 棟、住宅半壊 275 棟であり、新竹州の中では最も大きな被害が出た地域である(表 1)。なお、銅羅庄の中心地である銅羅の住宅の全半壊率は 94.9%で、住民の死亡率は 1.7%であった[被害数、被害率については、いずれも台湾総督府(1936)]。銅羅庄では銅羅と老鷄隆の 2 か所に地震記念碑があるが、まず銅羅にある記念碑についての調査結果を示す。

① 設置場所

銅羅の地震記念碑は、富士公学校(現在の銅羅小学校:苗栗縣銅羅郷福興村文化街 1 號)横に建てられ、現在は公園の一部になっている[銅羅郷誌編纂委員会(1998)]。1935年8月21日に建てられたことが碑文に記されている。

② 地震記念碑概要

記念碑は、城の石垣のような形状をした基壇の上に直方体の碑が建てられている構造で、碑の素材は砂岩である。基壇には、洗石子と呼ばれるセメントや小石を混ぜて作ったタイルで装飾されているが、風化により、一部が剥がれた状態となっている。基壇の最大の幅は 130cm、基壇の高さは 108cm である。基壇上の碑の高さは 184cm、幅が 1 辺 46cm である(図 13、図 14)。

③ 碑文

A 面(正面)

「震災遭難者慰霊碑」(図 4E)

C 面(背面)基壇

「昭和十年四月二十一日午前六時二分震災遭難者氏名
(省略) <347 名の殉難者氏名>
昭和十年八月二十一日建立。」

④ 改竄

碑文が改竄された形跡は見られなかった。しかし、風化により、基壇部分の碑文がほとんど見えない状態となっている。

⑤ 慰霊行事

現在慰霊行事は行われていない。しかし、設置当時の新聞によると、1935年8月21日に内海忠司新

竹州知事が参加する慰霊祭が記念碑前で行われる予定との記事がある[臺灣日日新報(1935年8月20日)].



図 13. 銅羅の地震記念碑

Fig.13 Memorial tower in Dora.

(2014年1月筆者撮影)

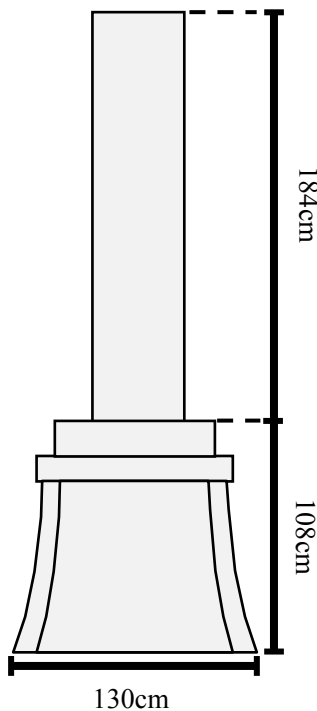


図 14. 銅羅の地震記念碑概略図

Fig.14 Memorial tower diagrammatical view in Dora.

2.6 銅羅庄老鷄隆の地震記念碑

老鷄隆は、銅羅庄西部の後龍溪南側に位置する集落である。石圍牆の地震の被害については住宅の全半壊率は 99.1%に達し、住民の死亡率は新竹州の中で最も高い10.3%であった(表 1)[被害数, 被害率については、いずれも台湾総督府(1936)].

① 設置場所

老鷄隆の地震記念碑は、集落南側(苗栗県銅鑼鄉興隆村)に設置されている。3周年を記念して1938年5月に老鷄隆の公学校(興隆小学校)近くに老鷄隆の有志や遺族の寄付により慰霊碑が建立された[臺灣日日新報(1938年5月9日)].この場所には、元々媽祖廟(天后宮)が建っていたが、地震で倒壊し、その跡地を利用して記念碑が建てられた。なお、その廟は、同じく地震で被害を受けた付近の廟(五穀宮)と寺(延平寺)を一つの廟にまとめ、現在は三聖宮として老鷄隆内に再建されている。

② 地震記念碑概要

記念碑は、4段の平らな基壇と銅羅と同様の石垣のような形状をした基壇の上に直方体の碑が建てられている構造で、碑の素材は花崗岩である。基壇の最大の幅は438cm、基壇を合わせた高さは236cmである。最上段の直方体の碑の高さは116cm、幅が1辺21.5cmである(図 15, 図 16)。なお、記念碑の周囲には1辺438cmの囲いがある。

③ 碑文

A面(正面)

「震災殉難者慰霊碑」(図 4F)

C面(背面)

「昭和十年四月二十一日午前六時二分」

基壇 A面(正面)

「殉難英霊

(省略) <166名の殉難者氏名>

④ 改竄

碑文が改竄された形跡は見られなかった。

⑤ 慰霊行事

現在慰霊行事は行われていない。しかし、地元住民による慰霊は日常的に行われているようで、線香

等が供えられていた。



図 15. 老鷄隆の地震記念碑
Fig.15 Memorial tower in Rokeiryu.
(2014年1月筆者撮影)

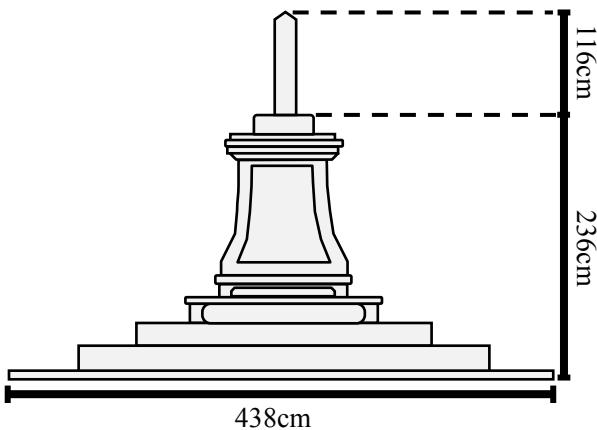


図 16. 老鷄隆の地震記念碑概略図
Fig.16 Memorial tower diagrammatical view in Rokeiryu.

2.7 大湖庄大湖の地震記念碑

大湖庄は前述の獅潭庄の南側に位置し、新竹-台中地震の震源地である関刀山も含まれる。現在の行政区分は苗栗県大湖郷に属している。地震による大湖庄の被害は、死者85名、重軽傷者321名、住宅全

壊939棟、住宅半壊462棟である(表1)。大湖の住宅の全半壊率は89.2%で、住民の死亡率は2.0%であった[被害数、被害率については、いずれも台湾総督府(1936)]。

① 設置場所

大湖の地震記念碑は、亀山(苗栗県大湖郷大寮村亀山1)に建てられ、現在は法寶寺境内の一部になっている[大湖郷誌編纂委員会(1998)]。1936年4月21日に建てられたことが碑文に記されている。

② 地震記念碑概要

記念碑は、城の石垣のような造りをした基壇の上に2段の基壇と円柱状の碑が建てられている構造で、円柱状の碑の素材は砂岩である。基壇の最大の幅は377cm、石垣状の基壇の高さは112cm、2段の基壇の高さは83cmである。碑の高さは187cm、直径32cmである(図17、図18)。

③ 碑文

A面(正面)

「震災記念塔」(図4G)

B面(側面)

「中華民國二十五年四月二十一日建立」

C面(背面)

「昭和十一年四月二十一日建之」

基壇 A面(正面)

「十年四月二十一日午前六時二分本島中部ヲ襲ヘル大地震ハ其ノ慘害實ニ名狀スベカラザルモノアリ當郡下亦不幸ニシテ此ノ災厄ニ遭ヒ死者二百四十六名負傷者六百五十二名ヲ算シ家屋ノ倒壊スルモノ其ノ數ヲ知ラス此ノ報一度天聽ニ達スルヤ畏クモ 天皇皇后兩陛下ニハ痛ク御軫念遊バサル御内帑金ノ御下賜ヲ忝ウスルト共ニ親シク侍從ヲ御差遣ノ上御優詔賜ヲ聖恩ノ宏大無邊ナル恂ニ恐懼措ハ能ハザル處スタ遠近同胞ノ熱誠ナル救援ニ惠マル真ニ感激ニ耐ヘザル處ナリ

惟フニ此ノ災害タルヤ生命財産ヲ失フ處甚大ナリト雖世道人心ニ無言ノ訓ヲ垂レ歸趨スル處ヲ知ラシム噫神ノ試鍊天ノ默示ナリシ言フベシ茲ニ記念碑ヲ建立シ謹シテ遭難者ノ遺靈ヲ弔フト共ニ刻シテ以テ後人ノ戒トナス

昭和十一年四月二十一日建之
大湖郡守正七位山木毅一郎」



図 17. 大湖の地震記念碑
Fig.17 Memorial tower in Taiko.
(2014 年 1 月筆者撮影)

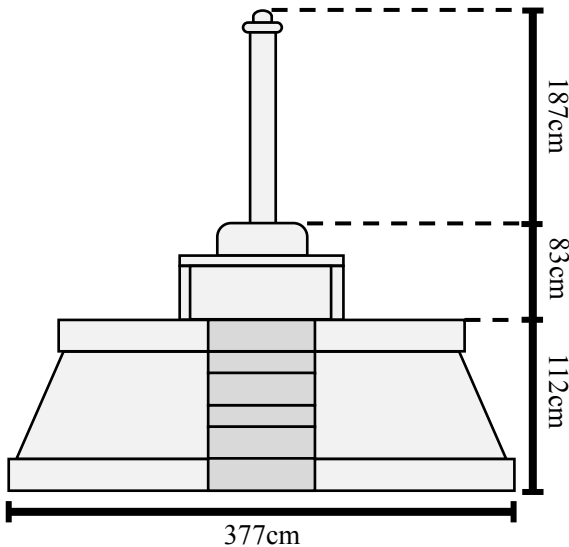


図 18. 大湖の地震記念碑概略図
Fig.18 Memorial tower diagrammatical view in Taiko.

④ 改竄

碑文に改竄された形跡がみられた。C 面の「昭和十一年四月二十一日建之」の部分は一部にセメント状のもので文字が埋められている跡があった(図 19)。また、基壇 A 面の碑文では、初めの部分が削られて見えなくなっていた。

⑤ 慰霊行事

現在慰霊行事は行われていない。



図 19. 改竄された地震記念碑(大湖)
Fig.19 Trace of the alteration in the Memorial tower (Taiko).
(2014 年 2 月筆者撮影)

§ 3. 考察

3.1 製作時期

新竹州における地震記念碑の設置年月が最も早かったのは 1935 年 5 月 18 日に建てられた石圍牆の碑であった。ここは住宅全半壊率が 100%の地域であるにもかかわらず、地震発生から 27 日後に記念碑が設置された。碑の製作期間等を考慮すると極めて早い時期に復興し、碑の設置を決めたと思われる。この理由としては、石圍牆は客家系の人々が古くから移民してきた地域で、村の周囲に壁を作り先住民の襲撃から守っていたなどの歴史があり、比較的自治力のある地域であったことが考えられる。また、記念碑には碑文の作者として個人名(陳漢初)が彫られ、その人物の写真が現在でも石圍牆の文化センターに飾られている。そのため震災当時、有能な指導者がいたことが復興と早期の記念碑設置に影響したと思われる[陳(不明)]。

その他 1935 年には、7 月に新店、8 月に銅羅に碑が建てられた。公館の碑については具体的な設置日が不明であるが、1935 年に建てられたとされている。1936 年 4 月には大湖に碑が設置された。碑文に大湖郡守の名が記されていることから大湖郡によって建てられたと考えられる。そして震災から 3 年後の 1938 年には大河底と老鶏隆に碑が設置されたが、こちらは地元の人々の寄付によって碑が建てられた。

このように新竹州では地震が発生した 1935 年には

4つの碑が建てられたことが分かった。一方、台中州では1935年には、1つも碑が造られず、震災から1年後の1936年によく3つの碑が設置された[塩川(2014)]。このことから、新竹州の被害が台中州と同じ規模であるにもかかわらず、碑の早期の設置により復興が台中州よりも早く進んだように思われる。しかし、新竹州の内海知事が1935年9月に高雄州知事へ転任することから、内海知事の震災対応の成果として復興記念の碑を設置するために、その建設時期が早まった可能性も十分考えられる[近藤・北村(2012)]。このような背景があるため記念碑の設置が必ずしも復興の早さを示しているとは限らないだろう。なお7月に建てられた銅羅庄銅羅の碑の碑文は、内海知事の字であることが分かっている[臺灣日日新報(1935年8月9日)]。

3.2 碑の形状

今回調査した7基の碑の形状は様々で、地域による類似点はほとんど見られなかった。例えば、公館庄や銅羅庄では、庄内に2基の碑があるものの、それぞれ形状や大きさは全く異なっている。

また、新店と公館(大坑)の碑は基壇の形状など似ている点があるが、新店の基壇は近年付け加えられたものである。碑の形状もどちらも円柱状ではあるが、新店は先端が平らであるのに対し、公館(大坑)は先が尖っているなど多くの点で異なっている。

一方、銅羅、大湖、大河底、老鷄隆には、城の石垣のような基壇が見られ、日本の統治の影響が表れていると考えられるが、その上の碑はそれぞれ全く異なった形状であった。

このように、新竹州では同じ地震記念碑であるにもかかわらず、類似の碑が無いという特徴がある。これは、碑の設置に関して、それぞれの地域で独自に計画して建てられたということが考えられる。

3.3 碑文と記念碑設置の目的

正面碑文は、全ての地域で異なっていたが、碑文の内容は7基のうち6基が震災の「慰霊碑」であった。その6基のうち3基には殉難者の名が刻まれ、残り3基のうち2基には殉難者の人数が正面碑文に書かれていた。大河底の碑には殉難者の名も人数も記されていないが、正面碑文は「震災慰霊碑」となっていた。これは大河底の碑は、地域を限定しないで、多くの人が亡くなった大震災の慰霊碑として建てられたと考えられる。

一方、大湖の記念碑の碑文は、「震災記念塔」であり、他の6基の碑とは少し性質が異なっていた。基壇上にある碑文には大湖における震災の被害や亡くなった人への慰霊の文も見られるが、御下賜金への感謝や後人の戒などが含まれ、統治する日本側の意向が強く影響した碑と考えられる。

3.4 移設と改竄

記念碑の移設は大河底と新店で見られた。大河底は道路建設のために派出所内の敷地に移動となった。派出所内では、碑の周囲は清掃され、碑の説明が表記された看板があり、近隣の住民にも認識されていた。一方、新店では記念碑(慰霊碑)が日常的に見える位置にあるのは好ましくないという住民の意向で公共墓地内へと移動となった。移動先の墓地では碑の周りは藪が生い茂り、放置されている状態となっている。付近の住民には碑の存在はほとんど知られていなかった。

一方、碑文の改竄は大河底、新店、大湖の碑で見られた。いずれも元号の部分(昭和)が削られていたり、埋められたりして見えないような状態にされていた。戦後、中国国民党の支配下に置かれた際に、日本統治を示す建物が破壊され、日本語の碑文などが改竄されていった時期があった[曾(2003)]。今回の地震記念碑もその改竄の一つであり、日本統治時代に建造された碑に多くみられることである[何(2001)]。むしろ、碑文の改竄が見られなかった残り4つの記念碑で「昭和」の文字が残っていることが非常に稀な例である。これは単に改竄を免れただけなのか、それとも台中州で見られたように、一度改竄された碑を文字が見えるように修復したという可能性も考えられる[塩川(2014)]。今回の調査では過去の碑の修復などの証言を得ることはできなかったが、改竄の有無については今後調査が必要であろう。

3.5 慰霊行事

現在、台中州では3つの全ての碑で公的な慰霊行事が行われていたが、新竹州では7つの碑のうち、1つ(大河底)で慰霊行事が行われていた。ただし、毎年4月21日の朝に村長が村を代表して焼香を行うのみで、住民が多数集まって行うような大規模な行事ではなく、個人レベルの慰霊である。一方、老鷄隆では、住民による焼香が行われていたが、遺族としての慰霊であり、公的な慰霊行事は行われていなかった。

日本統治時代では、新竹州でもいくつかの記念碑

で慰霊行事を行っていたという記録があり、当初から行っていなかったという訳ではない。恐らく一地域での被害は台中州に比べ小さいことから重視されず、公的な慰霊行事が衰退していったのではないと思われる。

§ 4. おわりに

今回の調査により、1935年台湾新竹-台中地震で建てられた新竹州の7つの地震記念碑は、改竄や移設もあったが、各地域に保存されていることが分かった。しかしながら、慰霊行事もなく、住民にもほとんど認識されていない記念碑もあり、過去の大災害を現代の人々に伝える役目をほとんど維持していない状態となっている。つまり、新竹州の地震記念碑は、現状ではその存在価値が見いだせない状況にあると言える。

台湾では災害記念碑が住民に嫌われる傾向があり、近年も南投市に設置された1999年の921大地震の記念碑が近隣の住民から忌み嫌われ、撤去されたという事態も起こっている[中廣新聞網(2013年10月31日)]。

歴史地震を理解・認識することは災害に対する備えを行うことができ、防災・減災の役に立つはずである。先人が建てた碑を風化させないためにも、災害記念碑に対する住民の理解を深めていく必要があるだろう。

謝辞

本研究を進めるにあたり、佛教大学歴史学部教授植村善博先生には終始ご指導頂いた。石圍墻の邱新河氏には貴重な資料を提供して頂いた。苗栗县政府国際文化観光局、獅潭郷役所、大河底派出所の方々にはデータの提供や聞き取り調査など、様々な点で協力頂いた。国立台湾図書館、苗栗県立図書館、銅羅郷立図書館には資料調査に際しお世話になった。また青木元氏の助言により、内容を改善することができた。ここに記して感謝申し上げます。

対象地震：1935年台湾新竹-台中地震

文 献

曾桂龍, 1998, 獅潭郷誌, 獅潭郷公所, 364 pp.
曾國棟, 2003, 台灣的碑碣, 遠足文化事業有限公司, 206 pp.
陳漢初, 発行年不明, 石墻文人陳漢初記載石墻村

開發史, 公館郷石墻社區發展協會, 14 pp.
陳正哲, 1999, 台灣震災重建史 日治震害下建築與都市的新生, 南天書局有限公司, 234 pp.
大湖郷誌編纂委員會, 1998, 大湖郷誌, 大湖郷公所, 855 pp.
何培夫, 1997, 臺灣地區現存碑碣圖誌 苗栗縣篇, 國立中央圖書館台灣分館, 273 pp.
何培夫, 2001, 臺灣碑碣的故事, 臺灣省政府, 195 pp.
黃鼎松, 1990, 苗栗史蹟巡礼禮, 苗栗縣文化中心, 174 pp.
黃鼎松, 1992, 我們的家郷苗栗一史地篇, 苗栗縣政府.
黃鼎松, 1994, 公館郷誌, 公館郷公所, 688 pp.
近藤正己・北村嘉恵, 2012, 内海忠司日記 1928-1939 帝国日本の官僚と植民地台湾, 京都大学学術出版会, 1222 pp.
澤田久雄, 1938, 臺灣地名の讀方及び人口表, 日本書房, 65pp.
森宜雄・吳瑞雲, 1996, 臺灣大地震 1935年中部大震災紀實, 遠流出版事業有限公司, 208 pp.
新竹州, 1938, 昭和10年新竹州震災誌, 新竹州, 784pp.
塩川太郎, 2014, 1935年台湾新竹-台中地震の台中州における地震記念碑について, 歴史地震, 29, 61-70.
臺灣日日新報, 1935年8月9日.
臺灣日日新報, 1935年8月20日.
臺灣日日新報, 1938年5月9日.
臺灣総督府, 1936, 昭和十年臺灣震災誌, 臺灣総督府, 710 pp.
銅羅郷誌編纂委員會, 1998, 銅羅郷誌, 銅羅郷公所, 653 pp.
徐明同, 2005, 日治時代台湾三大災害地震紀要, 中興工程科技研究發展基金會, 855 pp.
鄭世楠・葉永田・徐明同・辛在勤, 1999, 台湾十大災害地震圖集, 中華民國交通部中央氣象局・中央研究院地球科學研究所, 290 pp.
中廣新聞網, 利劍冲煞 南投921紀念碑拆除, 2013年10月31日, <https://tw.news.yahoo.com/%E5%88%A9%E5%8A%8D%E6%B2%96%E7%85%9E-%E5%8D%97%E6%8A%95921%E7%B4%80%E5%BF%B5%E7%A2%91%E6%8B%86%E9%99%A4-060753899.html> (2013年11月15日閲覧).